

郷土・広島にみられる富士川游の世界

江川 義雄

昭和五十年八月九日・富士川游顕彰行事よりすでに一五年の時が流れた。富士川游を知る人達も世を去り、郷土の資料も乏しくなりつつある。

游没後五〇年になり、平成元年十一月富士川游の五〇年忌が鎌倉市の山ノ内にある富士川邸で執行された。

筆者はこれを記念として、『^(一)広島縣醫人傳第二集』を刊行した。

地元の安佐地区では、一九八九年に『ひろしまレポート』^(二)に富士川游の連載紹介がのった。松木明知氏は『横切った流星』^(三)に游の先駆的業績を紹介している。かつて教鞭をとっていた東洋大学では、天野マキ氏^(四)、藤島岳氏^(五)を中心に游の児童問題・婦人問題・社会事業についての富士川游研究が昭和五十七年来継続されている。

平成六年広島市にアジア・オリンピック開催計画があり、顕彰碑の約二〇メートル北側にモノレール軌道敷地工事が着工されている。

富士川家の墓苑は広島市安佐南区安古市町長楽寺一丁目二七番地の小高い丘の上にあり、一族、三十余基の墓標がある。

その場所への参道も、同工事のため新設してあって、新たに参詣する人にはわかり難くなっている。

墓碑名は正信院釈法游で昭和十五年十一月六日没となっている。

これまた、丘の北面はブルドーザー工事により大きくえぐり取られ、景観一新、まったく山容あらたまるの変貌振りである。

富士川游旧邸跡は、住む人は変わったが、工事の影響はないようであり、雪が研究集会に使用した白壁土蔵の建物の壁面には、その補強のためか頑丈な板壁が蔽われている。

記念行事について

本年度の広島医学会総会は十一月十、十一日に開催され、その際、富士川英郎先生をお招きして記念講演が予定されていたが、健康上の理由から実現出来ず残念なことであった。

地元の安佐地区医師会（土井達郎会長）では、十一月六日の命日には別紙のような行事がもたれた。遺族として富士川美津子氏(女)が参加された。

富士川游先生没後五〇年記念の集い

〔その一〕

とき 平成二年十一月六日（火）午後一時

ところ 富士川游記念碑前（安佐南区長楽寺）

行事 (1) 記念碑参拝

(2) 記念撮影

〔その二〕

とき 平成二年十一月六日（火）午後六時四五分

ところ 安佐准看護学院講堂

行事 (1) 映画「富士川游」沖野宏敬

(2) 東京における「富士川游先生没後五〇年記念会報告」桑原正彦

(3) 「富士川游先生について感ずること」中川和夫

(4) 「富士川游先生の世界と広島」江川義雄

(5) 特別講演

演題 「今富士川游を考える」

講師 順天堂大学医学部医史学助教授 酒井シヅ先生

〔その三〕

懇親会 とき 十一月六日（火）午後八時三〇分

ところ 安佐准看護学院講堂

会費 無料

顕彰事業以後の状況についての報告

①第一期事業としての記念碑建立として二カ所

広島大学医学部構内と出生地に顕彰碑を建立する。

② 植樹 県医師会館前庭、吉益東洞碑の傍にすももの樹がすくすくと成長している。昭和六十一年当学会開催を記念して植樹したギリシアから送られたヒポクラテスのすずかけの木と共に、記念事業を何時までも印象づけるであろう。

③ 未発表史料発掘と続芸備医人伝編集努力は地みちに進められ、『広島医学』の「医人伝」のコーナーにその連載がみられる。

④ 記念出版 英郎先生のご尽力と長年の研究整理作業で、富士川游著作集・全十巻が思文閣から昭和五十五年刊行され、医学関係資料が現代に広く活用されている意義はきわめて大きい。また本年十月に刊行された『富士川游』^(七)は、偉大な人間像があますところなく伝えられている。

医学以外の業績も、関係学会、研究団体などと提携して新たな出版計画も、その第二期事業として、たとえば、児童教育学や社会科学など一本に纏め、複製再版の企画も意義あるものであると考える。

富士川游が東洋大学社会科学科の初代科長として開講し、児童の「教育病理」^(八)など、児童教育の分野で、その先覚者として活躍し、理論と実践の合一した活動は意外に知られていない業績である。

それらはこれからの研究すべき新たな事業分野ではあるまいか。

精神文化活動面における郷土への遺産と影響

富士川游の活動分野は広く、かつ深い。医学面では、呉秀三らと共に創始した医学史学であり、次いで芸備医学会の機関誌である『芸備医事』は、游が三十一歳、明治二十九年に創刊され、現在は『広島医学』へと引きつがれている。この『芸備医事』はたんに學術誌というよりは、医学・医療を中心とした医療文化情報誌の性格を具えていたから、現在の原著紹介が主体となった『広島医学』の編集とは異ったものである。それ故に郷土の歴史に関心をもつ人達に評価され、貴重な資料として活用されてきた。直接、郷土とは関係があるとはいえないが、三十八歳の時に内科学会創立、四十二歳の時に

小児科・児童学会の発展に尽力し精神病学会についても、ドイツ・イエーナ大学での研究や呉秀三との交友感化などにより、郷土における社会的活動として開花している。

医学倫理高揚としては、遊はすでに二十七歳の若き時代から先人の偉業を景仰しようとする志が強く、先哲祭を行い、後年先哲追薦会として定着させた。それは医療従事者すべての人達が最初に心得え、終生もち続ける基本的理念に他ならないものである。

在来の医療世界に、この思想・概念を注入させた功績は大きく、医史学会創立者の一人として忘れられてはならないであらう。

児童教育と巡回講演などの社会活動は十分知られていない。遊の学問的視野が拡大され、たんに医学のみならず、総合科学的世界観からの成果がこの課題であらう。その始動は滞独帰国後からである。問題意識とその対応には、科学的立場が尊重された。

社会事業としての児童感化活動は机上の空論ではなく、呉秀三の依頼により顧問となった広島島の修養院施設で児童達と起居を共にして、それらの観察、体験が基本となり、毎月のように広島に帰り、それが児童研究の報告として刊行されている。一見無関係にみえるような社会事業とのかかわりの中でも、医学との関係が認められ、それには内科、小児科、精神科、婦人科にも理解を有して、関係した単行本、雑誌発行にも名を連ねている。

遊の弟子であり、のち日本児童学会の会長となった竹内薫兵は「富士川先生を除いては日本の小児精神医学を語ることはできない。先生は斯界の恩人である」と。日本で最初の児童教養相談所は遊により開設され、その担当者は弟子の三田^{さいだ}谷^や啓^{ひらく}である。三田谷の児童研究に関する資料はコピーされ、広大医学部医学資料館に保管されている。

現代でも児童に対してこの社会事業は重要であるが、今から八十余年前に、遊がこの問題についての学問的理解と科学的な医学的態度を堅持し、それに宗教的信念をもって実践した事業は驚きである。大正七年から継続的に月に一度は帰広

し、広島市尾長町にあった広島修養院（現在は県立広島学園と改められ、東広島市に所在するが、当時の資料はない）を訪れ、指導し、収容児の調査を行っていて、その成績は「異常児童調査」として昭和二年に広島修養院から発行され、同七年にその増補が刊行されている。

定期的帰広の途次、京都・大阪での講演活動が行われている。

養神協会の創立

この事業は、游が精神衛生の復興と促進を願って、この協会を作り、その理想実現には、妹千里の婿・石井正人の推進、協力をえて、現在広島市佐伯区五日市町にある石井養神館の建設となった。その由来・目的は格調が高い。綱領の一部には次のように記されている。医学は教育・宗教その他各面の協力がないと完全に目的を果すことが出来ない。心神の健康を促し、不健康な精神作用によっておこる欠陥を予防し、なくしようとするものであって、営利売名のためでなく、このことが多少でも社会に貢献するところがあれば、欲びとするところであると趣旨を述べている。游は明治四十五年には東洋大専門部で社会事業関係の講義をし、大正十年の大学昇格と共に初代科長となり、社会衛生学、教育病理学や感化院制度、少年法などの担当をしている。游の調査、臨床、研究、発表が続々として体系づけられ発行されている。昭和四年大学を辞任し、その後任に弟子の三田谷が就任し、游の精神が継承されている。同じく游は日本女子大学に、他の大学に率先し社会衛生学講座を設置し、教授となっている。昭和八年退任と共に、その席は弟子、佐藤美實氏に委ねられている。游の社会事業へのエネルギーは医学を主体にして、哲学・宗教を横糸としておりなされ、行動化され、体系づけられているといえる。游のもつ諸学エッセンスの社会化であり、実践の場でもあった。

その学問的なフィールドには郷土・広島も大きく関与しているといえる。

游の宗教活動は若くしてその情操の芽生えがあったとされているが、明治四十五年、游四十七歳の時に、鎌倉正信会を

創立し、大正八年、游が五十四歳の時に正信会と改められ、医師の入会も多数で、側近の人達や広島島の医師、一般の会員も多くみられる。広島市、安佐郡、五日市町地区では確かな会員数は不明であるが、富士川美津子氏の印象では三百人程度ではなかったかといわれる。何しろ文学博士・医学博士の游先生が新妙好人伝についての講演であったから好評であった。

『飽薇』について

『芸備医事』が郷土の医療情報誌であるならば、『飽薇』は芸備の総合文化誌と評してよい。

雑誌・飽薇は飽薇同好社の機関紙である。同好社は広島県下、芸備両国の出身者ならびに縁故のあるもので組織されている。この創立は大正十三年十二月で、游が五十九歳で主幹となっている。いわば晩年の集大成化された知識が凝集された、円熟した時期にあたっている。同好社創立の動きは、それより十年前頃より時々集會があり、会・誌名の命名は游によった。一風変わった誌名であるが、飽とは飽国より由来し、薇とは備前・備中・備後の黄薇（吉備の古字）を組合せて作った文字である。

大正十四年一月二十八日発行

【第一巻第一號】

飽 薇

第一號

一般的な県人会と異っていることは、役員、会員に学者が多く、現在のペンクラブと違い各界学者の研究余談的な例會が毎月開かれている。役員や執筆者の顔ぶれは代表的学者である。

本誌の編集方針には郷土に対して精神文化への連帯や愛情や期待がもたれている。発行は東京であって、取材内容は郷土の広島だけでなく、東京を中心として全日本に亘って、文化的好奇心を刺戟するものである。芸備医事にみられる游の発想が、本誌にも躍動している。

創刊号には、愛郷心の題名で小文を寄せ、道徳的愛郷心の高揚をといている。

当時として十分とはいえない情報網から、種々の文化情報が東京であれ、京都であれ、広島でも入手可能であった。中央と地方の大小の学問に対して行事・出来事の報道や取材が多面的に扱われている。

読者にとって地域協同体への共感を与え、自分の属していない社会文化面への刺戟や教養に関する話題や記事が提供されている。また読者自身の立場から、さらに広い他の社会文化世界へつれ出す筆力があり、その効果は、本誌の目的の一つである相互の親和感を強め、相互理解から連帯を深め、学問を通しての人間関係を構築させる効用はまったく特異なジャンルを形成している。遊の目指す諸学を総合した知的郷土愛の表われとも言うべきである。現代ジャーナリズムの世界においても、これに類する知的生産性のある情報誌の刊行は見られない。富士川游顕彰の趣意書にも紹介されなかった密度の濃い読み物を掲載している。

飽薇の基本的な編集姿勢は郷土・広島に芽生え、執筆者は役員・会員で論説には各界で活躍中の学者が網羅されている。法学・歴史・宗教・文学・医学・芸術など人間の精神文化活動の全般に亘り、比較的平易に書かれ、読者層は文化人から学生に至るまで幅広く、どこにいても、在京、在広各界の文化情報や活動している文化人の消息を知ることが可能である。

倉田百三の「芸術と宗教」、富士川游の「菅茶山先生の医説」などの論説があり、著述、講演、組織の育成活動をのせ、東京での各種集会の記事には芸備協会、修道館、芸備医学会、女子郷友会などがあり、学園欄では、各大学の卒業者名、高校、海兵から県下の各中学から、県下各地区での行事、たとえば三原敬老会の催しなどがある。

政府、高官のリストや加藤友三郎総理の記事があり、変った紹介では、県人出版の図書として『医学中央雑誌』、『治療』、『備後史談』、『青むしろ』などがある。

医学関係では、星野良悦の木骨、土生玄碩、吉益東洞、高野長英、野坂完山、橋本宗吉、伊沢蘭軒、菅茶山などや医学

会の記事もみられる。浅野図書館記事もユニークである。人物列伝では福山藩蘭医杉享二をはじめ、現教授に至るまでの、立志伝的紹介記事もある。肩のこらない読物として、明治事物起源として婦人参政論、藩侯の洋紙工場、保命酒、キルク栓製造などがあり、歴史に関するものは流石に多く、敵島神社、陶晴賢の碑、赤穂義士、頼山陽、廉塾などがある。広大なビジョンで創刊され、毎月刊行されてきたが、游の逝去や戦争被害などにより、終刊は、小田平義が主幹となった昭和十五年十二月となっている。広島市立中央図書館蔵のものでは十六巻五号までしか見ることが出来ない。

飽微同好会創立当時の役員としては、以前からこの企画をもっていた花井卓蔵、秋山雅之介、それから常務委員に名を連ねているものは下田次郎、高島平三郎、尼子四郎、松井茂、浜野知三郎、和田英松、真田鶴松、富士川游。主事には游の手足となって活動した常光浩然、清寺漸せいじやまがいた。そのほか河野元三、福岡佐次郎、横山雅男などいる。これらの人脈は郷土出身者ではあるが、当時の日本を代表する学者達であり、相互協力し、游のもつすぐれた友人との交友・接触により、それらの世界は身近となり、在京者にも、目は広島に向くような効用を与えている。

これだけ充実した内容を具えているのは、編集陣の手腕にもよるが、また寄稿者の質にもよるであろう。役員も寄稿者になっっているのです、本誌の性格を理解する上にも、その人達について、二、三行程度の紹介を次に掲げる。

花井卓蔵（明治元年・一八六八〜昭和六年・一九三一）政治家。高橋順次郎らと桜南塾生・法学博士・貴族院議員・中央大学教授。

秋山雅之介（慶応二年・一八六六〜昭和十二年・一九三七）法学者。芸藩舟奉行の家に生まる。東京大学法学部卒。外務省・陸軍省・朝鮮総督府参事官。国際法の権威者。政法大学学長。

下田次郎（明治五年・一八七三〜昭和十三年・一九三八）女子教育家。東京大学哲学科卒。文部省。各国へ留学。ドイツで游と交友（樗牛と同期）東京女高師教授。著書多數。

高橋順次郎（慶応二年・一八六六〜昭和二十年・一九四五）世界的な仏教学者。三原に生まる。オクスフォード大・ラ

イブチヒ大卒。文学博士。東京大学・東京外語大学・東洋大学の教授。学士院会員。『新修大藏経』、『大日本佛教全書』などの著述。

松井茂（慶応二年・一八六六）昭和二十年・一九四五）官吏。東京大学法学部卒。警視庁。知事を静岡・愛知と歴任。法学博士。貴族院議員。

和田英松（慶応元年・一八六五）昭和十二年・一九三七）歴史学者。軈出身。東京大学卒。同史料編纂掛。東京大学教授。学士院会員。

真田鶴松 漢学者。日露戦争に従軍。海軍大佐。攻玉社中学校長。

尼子四郎（慶応元年・一八六五）昭和五年・一九二九）医師。広島県戸内町出身。游とは広島医学校入学以来の刎顔の友。広島医学会創立（明治二十九年・一八九六）者の一人。『医学中央雑誌』創刊ほか游と共に多くの雑誌の図書発行、日本医師協会、看護協会創設にも尽力した。

浜野知三郎 漢学者。二松学舎教授？

天野麿 医師。呉出身。游の親族。東京大学卒。西丸和義と呉一中時代同期。

その他にも

横山雅男（旧姓・清田）広島県人。芸備医学会創立当初からの幹事。顕微鏡講習所主任。

常光浩然（明治二十四年・一八九一）昭和四十八年・一九七三）三次市出身。僧侶。東洋大学で游の教え子、游宅に寄寓。中山文化研究所理事。佛教タイムス主宰。著述多数。

清寺漸（明治二十二年・一八八九）昭和二年・一九二七）游と同村の生まれ。游をたより上京寄寓。薬剤士。また常任でなくても本誌に関係した人物では

福岡佐次郎（文久二年・一八六二）大正十四年・一九二五）呉に出生。広島医学校・東京大学医学部卒。陸軍軍医。糧

株関係の陸軍技師。芸備協会・芸備医学会に活躍。

遠山諦観 福井県の人。本願寺布教師。正信協会の代表者。などがいる。

浅野図書館に関連して

現在は広島市立中央図書館となっているもので、これは元和五年浅野藩主・長晟が紀州より安芸に移封されてから三百年の記念事業として創立されたものである。その企画は大正六年市長になった田部正壮である。その子息は岡山医大病理学教授・田部浩である。

游は大正九年、五十六歳の時に高楠順次郎・下田次郎と共に顧問となっている。文教の振否は国民の読書の勤惰に因るといわれたように県出身の大家が名を連ねている。エピソードとして、明治四十年に『芸藩通志』（文政八年・一八二五、藩命により頼杏坪が編纂、一五九卷）の復刻事業に際して、岡田俊太郎館長より游は協力支援をうけ、それは五卷に収められ出版したという。

図書館蔵書数は五万六千余部で、黒板勝美、新村出、巨理章三郎など著名人士の来館が記されているが、原爆により貴重な図書は灰塵に帰した。

社会衛生学の面について

筆者はすでに『広島県医人伝第一集』⁽¹⁾で触れたところである。これらの活動背景は科学性と宗教性の考え方で裏打ちされている。

先輩の高島平三郎は明治三十五年（一九〇二）日本児童研究会をつくったのであるが、游三十七歳の時、高島と共に東洋大学専門部第一科で社会事業関係で講義をしている。

大学運営面からしても、井上円了、高島平三郎、富士川游をぬきにして、東洋大学の歴史を語ることはできないとも言われ、同大学の中心的役割を演じている。学内に社会事業学会を創り、自から会長となり、副会長には『飽薇』編集者である常光浩然がなっている。

『飽薇』以外のもので、広島に影響を与えたものに宗教活動があり、その機関誌『法爾』が刊行され、その幹事として高桶順次郎と藤岡勝二が担当している。

游がドイツから帰国して『人性』を発刊したり、『異常児童』などに関する研究は、今後その分野の専門家による論考を望むところである。

富士川游没後五十年、その赫々たる業績も風化なしとしない。

しかし今、富士川英郎博士により『富士川游』が刊行され、医の原点に一灯を掲げられた。その光芒の下に私達は偉人の理想を再見しようとするものである。

文 献

- (一) 江川義雄『廣島縣醫人傳』平成元年十二月九日。
- (二) 下野岩太『ひろしまレポート』昭和五十年五月。
- (三) 松木明知『横切った流星——先駆的医師たちの軌跡』メデイサイエンス社、一九九〇年十月。
- (四) 天野マキほか『東洋大学児童相談研究』第六号、一九八七年三月。
- (五) 藤島岳ほか『東洋大学の社会事業科の成立過程と富士川游について』『東洋大学昭和五十九年度特別研究報告』。
- (六) 富士川美津子氏 游の次男・故富士川義彦氏の夫人(広島県安芸郡熊野町柿迫一三九)。
- (七) 富士川英郎『富士川游』小沢書店、平成二年十月。
- (八) 富士川游『教育病理学』教育研究会、昭和五年。

(広島県廿日市市)

Fifty years after his death, Dr. Fujikawa Yū's native place, Hiroshima, still remembers him

by Yoshio EGAWA

Fifty years have already past since the death of Dr. Fujikawa Yū. Many memorial events have been held to mark this anniversary: First, two monuments were constructed; second, the planting of a memorial tree; and finally, some short books on the life of Dr. Fujikawa have been published.

Dr. Fujikawa was a famous scholar in many fields. These included medicine, religion, special sciences and philosophy. Through his extensive studies he was able to accumulate a vast volume of knowledge, thereby realizing his high ideals.

On occasion, he used to return to Hiroshima to help educate the boys of the Hiroshima juvenile reformatory (Hiroshima Seiyoin), and many reports have been published on his research and observations there.

For the rural people, Dr. Fujikawa gave religious talks on Sinran Shohnin. His tales on religion were published as a series of books called Neo Myohkohnin.

In addition, he published an interesting periodical journal called "hohbi", which was concerned with his native place.

Finally, he was well respected as an adviser for the Asano Library in Hiroshima.